G-18

食物アレルギーを持つ子どもへの対応
―保育園・幼稚園・こども園のHPの事例より―
Care for Children with Food Allergies Examples from Websites of Nursery School, Kindergarten and Day-Care Center

長谷川 彩楽†　　千田 眞喜子†
Sara Hasegawa　　Makiko Senda

1. はじめに

食物アレルギーとは「食物によって引き起こされる抗原特異的な免疫学的機序を介して生体にとって不利益な症状が惹起される現象」のことを言う。食物による不利益な反応は誰にでも起こり得る毒性物質による反応と、ある特定の人に起こる非毒性物質による反応に分けられる。食物アレルギーの発症は感作成立と症状惹起から成り、体内への侵入経路は経口、経皮、吸入や注射などがある。症状としては皮膚症状、粘膜症状、呼吸器症状、消化器症状、全身性症状など多彩である。そして食物アレルギーの原因食物で最も多いのは鶏卵、牛乳、小麦、ピーナッツ、果実類、魚卵、甲殻類、木の実、そばなどが挙げられている。乳幼児に食物アレルギーが見られる理由は消化管粘膜の機能及び免疫機能が未熟であり、食品中のタンパク質の消化、分解が不十分なままに腸管粘膜から直接取り込まれやすく感作されやすいためアレルギーが起こる（今津屋・宅間、2016)。

アナフィラキシーとは「アレルゲン等の侵入により、複数臓器に全身性にアレルギー症状が惹起され、生命に危険を与え得る過敏反応」のことである。さらに「アナフィラキシーに血圧低下や意識障害を伴う場合」をアナフィラキシーショックという。科学伝達物質が遊離されることにより標的臓器において様々な症状が発生 lgE が関与する免疫学的機序、たまりマスト細胞や好塩基球よりヒスタミン、トリプターゼ、ロイコトリエンなどの科学伝達物質が遊離されることにより標的臓器において様々な症状が発生する（山田、2017）。

以上から、子どもたちと昼食を食べる際の、アレルギーを持っている子どもへの保育教諭の関わり方に着目した。保育教諭とは、「幼稚園教諭免許状」と「保育士資格」の両方の免許・資格を有している者である（文部科学省、2019）。そこで、ホームページ（以下「HP」と称す）の情報から保育園・幼稚園・こども園での食物アレルギーに関する対応を調べ、現場での情報も集めて、アレルギー対策について検討する。本稿では、「HP の情報から、食物アレルギーの子どもへの対応」について発表する。

2. 研究手法

京都府・滋賀県・富山県の 85 箇所の保育園・幼稚園・こども園 の HP から「食物アレルギー対応」についてのテキストデータ情報を得た。 解析ソフトは KHcoder（参考文献）を用い、最小スパニングツリーを求めた。さらに対応分析も行った。

†花園大学,　Hanazono University

3. 結果・考察

3.1　記述統計

表-1 に記述統計の結果を示す。総抽出語は 2726 語であり、そのうち 324 語を解析に使用した。語の出現回数の平均は 3.29 回であった。

表-1　記述統計の結果

項目	数
総抽出語数	2726
総抽出語数のうち使用語数	1066
異なり語数	473
異なり語数のうち解析に使用した語数	324
出現回数の平均	3.29
出現回数の標準偏差	9.04

3.2　言葉の出現回数

図-1 に言葉の出現回数の結果を示す。横軸は語の出現回数、縦軸はそれぞれの語が何種類であったかを示す。横軸は対数目盛で示す。

1 回しか出てきていない言葉は 200 個以上あるとわかった 。出現回数 5 回から 100 回まで出ている言葉は非常に少ないことがわかった。

3.3　言葉の出現回数

表-2 に頻出語リスト（10 回以上出現）を示す。最も多い言葉は「アレルギー」（82 回）で、次に多いのは「除去」と「対応」（57 回）であった。つまり、「医師の診断を受け、家庭と相談し、アレルギー除去の対応を行っている」ことがわかった。

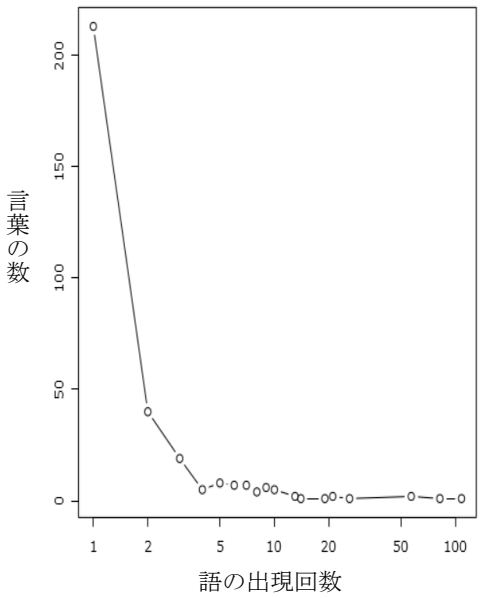

図-1 言葉の出現回数

表-2　頻出後リスト（10 回以上出現）

抽出語	出現回数
アレルギー	82
除去	57
対応	57
診断	26
食物	21
医師	19
給食	14
家庭	13
相談	13
子ども	10
場合	10
代替	10
保護	10

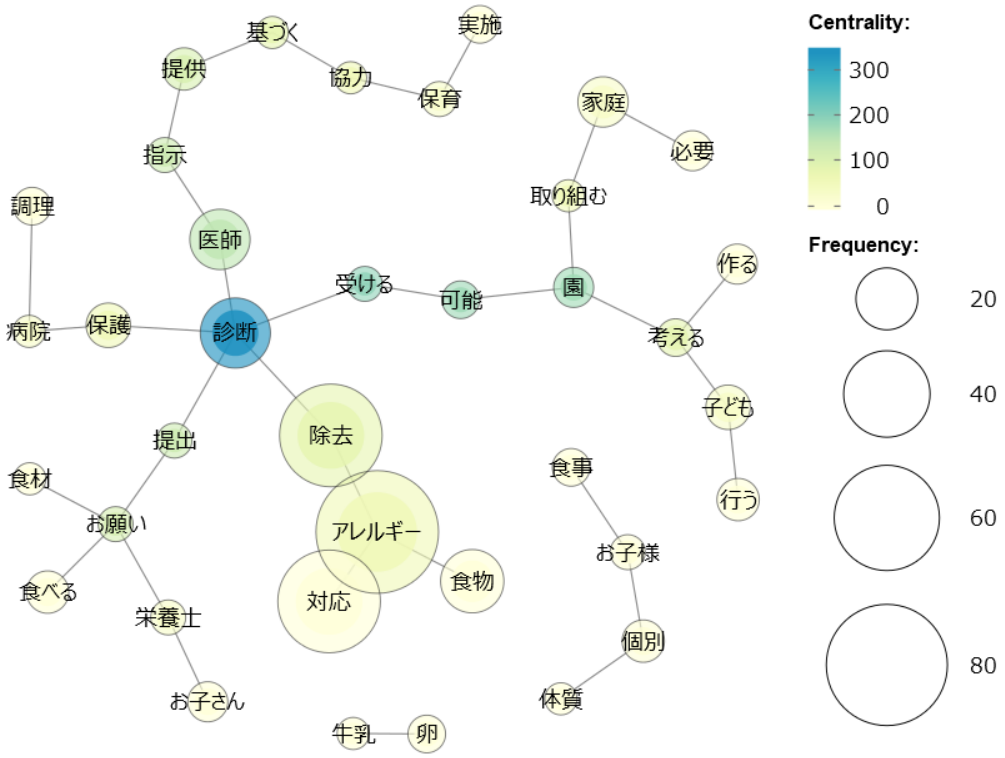

図-2　最小スパニングツリーの結果　語数 38、共起関係 35

3.4　最小スパニングツリー

図-2 に最小スパニングツリーの結果を示す。最小スパニングツリーとは、最小スパニングツリーとはわかりやすくするために最も重要な共起関係だけを表示したものである。

次数中心性が高いほど黄色→黄緑色→青色で示す。共起関係（他の語とつながっている線）が多いほど中心性が高い。出現頻度が高いほど大きいバブルで、強い共起関係ほど太い線で示す。語数は 38、共起関係は 35 であった。図より、以下のことが明らかになった。

（1）医師の診断を受け、お子様と個別に対応し、アレルギー除去を行う。

（2）栄養士の方にお願いをして、可能な限り代替食を作る。アレルゲンとして多く挙げられたのは牛乳・卵である。

3.5　対応分析の結果

図-3 に 10 回以上出現した語を用いて対応分析を行った。以下に示すように４つのカテゴリーに分類できた。

（1）第１象限
　給食での対応

（2）第２象限
　家庭により子どもの場合に応じて除去

（3）第３象限
　子どもの保護のため、医師の診断を受けたうえでの代替食物の用意。

（4）第４象限
　アレルギーでの食物の相談

4. まとめ

HP の情報から、食物アレルギーの子どもへの対応について検討した結果を以下に示す。

（1）言葉の出現回数から、食物アレルギーを持つ子どもへの対応として、多くの保育園、幼稚園・こども園ではアレルギー対応を実施していることが分かる。

（2）最小スパニングツリーや対応分析の結果から、医師の診断を受け、保育者や調理師と話し合いを行い、代替食を提供していることが示され、それぞれの子どもに合ったアレルギー対応を行っていることが明らかになった。

（3）アレルギーの成分の除去を行い、栄養面もしっかりと考え、除去が必要な食品の栄養素を代替できる食品を用意することが大切であるが、保育者同士の情報の共通も大切だと考える。

（4）誤飲誤食を防ぐためにも、どの子どもがどの食物にアレルギーを持っているのか把握することも重要であると示唆された。

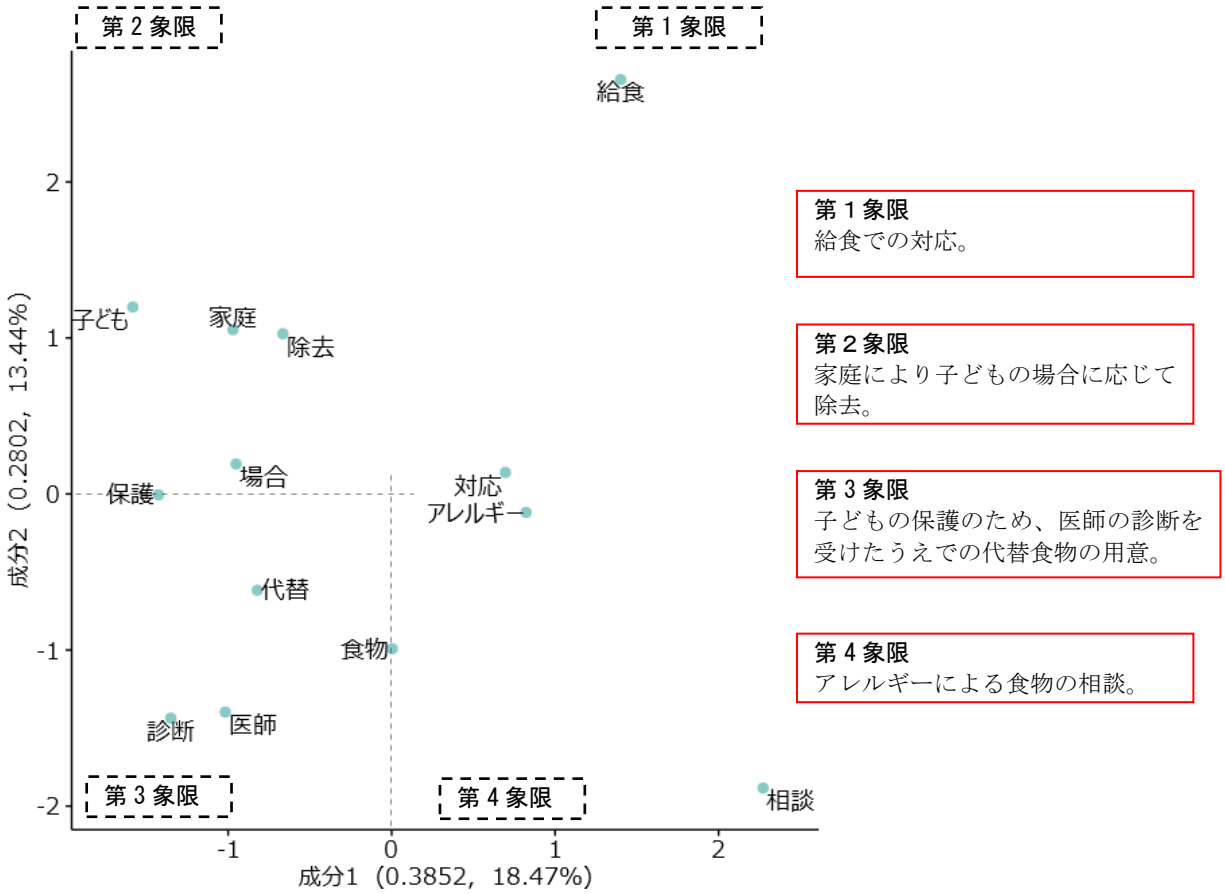

図-3　対応分析の結果（出現回数 10 回以上）

5. 今後の課題

ボランティア活動を通して実際の対応を観察する。実際にこども園の保育教諭の方にアレルギーに関してのアンケートを実施し、結果をまとめ、その結果から食物アレルギーへの対応をまとめる。

参考文献

・KH corder、http://khc.sourceforget.net/、(参照：2019/2/12)、
・樋口耕一、社会調査のための計量テキスト分析―内容分析の継承と発展を目指して―、pp.1-233、ナカニシヤ出版、2014
・今津屋直子・宅間真佐代、2015、子どもの食と栄養、保育者出版、p.104～108.
・文部科学省、2019、幼保連携型認定こども園と保育教諭、http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/002/siryo/__icsFiles/afieldfile/2018/08/08/1407922_05.pdf（参照日：2019/07/10)
・山田裕美、2017、「アナフィラキシーとは？」、診断と治療社、p.12～14.